



ラウンド①【淫らな烙印】

湿り気を帯びた触手が、体の自由を奪われた少女達を吊り上げていく。

彼女達5人はそれぞれの戦いで疲弊していたところにアラクネと呼ばれる不定形の生物をけしかけられ捕縛された。

それは、元より貪欲に力を求めるアラクネの性質を利用した、ある組織による計画の一つだった。

その計画とは、組織にとって脅威であり多大な力を持つ人物を捕獲し、実験体として研究・利用するというものである。

組織によってある程度制御されたその生物により思惑通りに彼女達を捕らえることに成功した。

暗い牢獄のような場所に捕らわれた少女達。恥部を剥き出しにされ、抵抗もままならないままその肉体をあらゆる手段で蹂躪されていく。

これはその始まりに過ぎなかった。



「くうっ、取れない……！ノエル、大丈夫？怪我は……？」

「いやあっ！う、動けない……！？レイチエルさんまでっ」

「私を拘束するなんて、蟲風情が調子に乗らないで……！」

「い、いやっ！服が……それに足元がぬるぬるしてっ」

「まさか、このような事態になろうとは、迂闊でした……」



「これは、霧…？はあっん…身体が熱い、です…」

「はあ…はあ…身体がおかしい、よ…ドキドキ、する…」

「んんう…品のない甘い匂いね…まさか、これはっ…」

「は、はれ…？甘い、いい香り…あんっ♡ん…」

「っ…このガスは…ノエル！吸っちゃ…んあっ…」

「はあ……はあ……っ♡と」

散布された催淫効果のある霧が晴れるとそこには
艶めかしい声で悶える彼女達の姿があった。
その身体は汗でひかり、股からは愛液がとめどなく
溢れている。

「こんなモノで、私を、んっ……抑えられるとでも？」
そう気丈に振る舞うが、身体は正直に蜜を漏らしていた。

そんな彼女達の反応を見てか、触手が新たな動きをはじ
める。

「あんっ♡そんなとこ、擦らないでえっ……！」

五本の新たな触手が彼女達に狙いを定めた。





「んあああああっ……♡♡♡」
触手達が一斉に勢い良く挿入はじめ、彼女達に官能の衝撃が走った。

「やっ、嘘っ!? 触手がっ!? や、ふああ……」
「んぐうっ……私を、慰み者につっくあっ!」

既に十分すぎるほど濡れていた秘部は、抵抗もなくするりと受け入れてしまう。

「あ、ああっ、こんなので……んあああ!♡」

「くあっ……やめ、ろっ、ひあっ、これ、はげしっ♡」

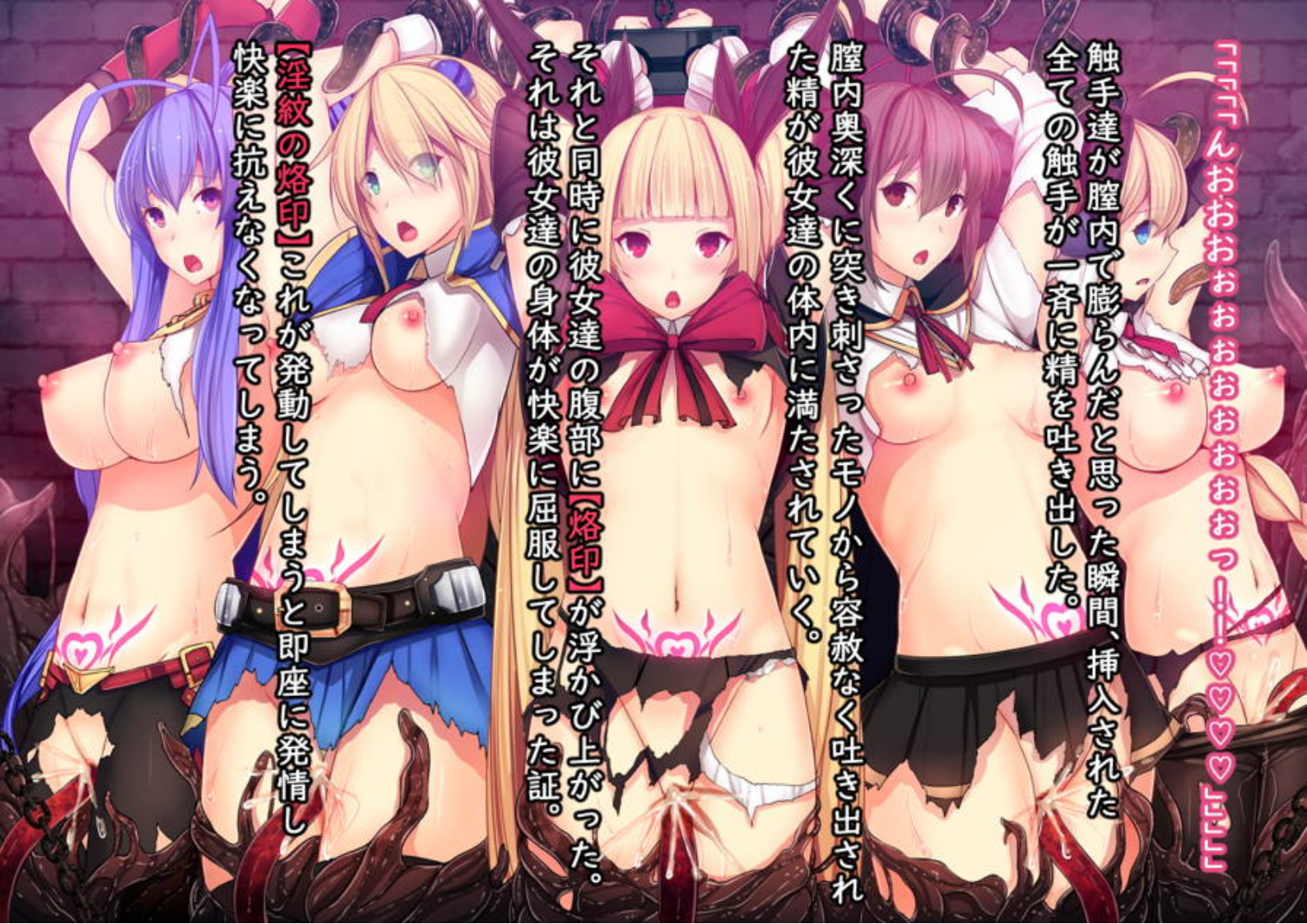
「んおおおおおおお——♡♡♡♡♡」

触手達が膣内で膨らんだと思った瞬間、挿入された全ての触手が一斉に精を吐き出した。

膣内奥深くに突き刺さったモノから容赦なく吐き出された精が彼女達の体内に満たされていく。

それと同時に彼女達の腹部に「烙印」が浮かび上がった。それは彼女達の身体が快楽に屈服してしまった証。

「淫紋の烙印」これが発動してしまうと即座に発情し快楽に抗えなくなってしまう。






「ああ…♡おなかのどこ、じゅんっでするっ…♡」

「ひゃあ…♡しよくしゅ…♡すすぎるよお…♡」

「うそ…よ、私が、あ♡こんなもの…♡に…♡ん♡ん♡」

「はあ♡んっ♡ぬるぬる…♡きもち、いい♡んはあ♡」

「この…♡腹部の刻印…♡私たちは、奴隷…♡?♡」



快樂の狂宴が終わり触手から解放された彼女達は
ほどなくして意識を失った。

そして、それぞれ貴重な研究実験体として何処か
の施設に運び込まれていく。

敗北者の物語はまだ終わらない。

ラウンド②【魔力吸収、強制快楽絶頂】

空間を埋めつくすほどの巨大な機械。

あらゆる事象を観測できるほどの性能はあるがそれを稼働させるには相応の燃料が必要になる。

そこで標的となったのが、絶大な力を備えた彼女達だった。捕縛した者を機械に組み込みその力をエネルギーとして抽出する計画が実行された。

しかしそれを行うためには女達を心身ともに無防備な状態にする必要があった。そのための手段として最も容易であり効果的であったのが、

【性的快楽により絶頂させる】ことだった。

その結果捕縛された彼女達はすぐに投薬と肉体改造を施され、全身の感度を数十倍に引き上げられた。

そして計画が最終段階に入り、彼女達は巨大な装置に取り付けられる。

彼女達はこれから、決して逃げられない快楽絶頂地獄を味わうことになる…。

「はあ、はあ、いいいかげんにさ……しなさい」

「もう、いいだろお……これ、はずせよお……」

「一体いつまで、私たちを、拘束して……り、凌辱、すれば……」

恥部を全て晒し、磔にされた彼女達。
既に肉体改造され、感度を上げられた身体は、少しの衝撃
で官能をもたらし、甘い息を吐く。



「ぐっ、あっ、こんな…もので」

「ん、んっ！うう…ま、まだなにかする気なのか…」

「あっ…んっ、微力な、振動がっ…んんっ」

膣内に挿入された機械が徐々に動き始める。
微力な振動だが、今の彼女達はそれだけで股を濡らし、
とめどなく愛液を溢れさせはじめた。



「ああああ…か、からだから力が、ぬけて…！」

「ひああっ！なんだよこれっ、ひから…ぬけりゅ…！」

「ああっ！一体なにを…、んんっ！ちから、が…！」

装置から射出された小型の機械が彼女達の恥部に
取りつく。
その機械からワイヤーのような青い光線が収束した
瞬間、彼女達は快感の衝撃に悶え喘いだ。
その肢体は汗と愛液で濡れ、快感に抗おうと必死に
身じろぎしている。



「わたくしの、ちからを……よくも……やあつ、ま、またっ!？」

「も、もうらめ……らにも、あんっ! かんがえられない!」

「あっんっ! この、ままでは……あっ! なにか、きま、すっ!」

恥部に取り付けられた機械が発する光線がさらに強くなるにつれ、彼女達の反応も激しくなっていく。快感に反応するように腰が小刻みに動き、もはや彼女達が限界に達しようとしていることは明らかだった。



「あ、ああっ♡、…イクっ！…イっ…あああああああっ！」

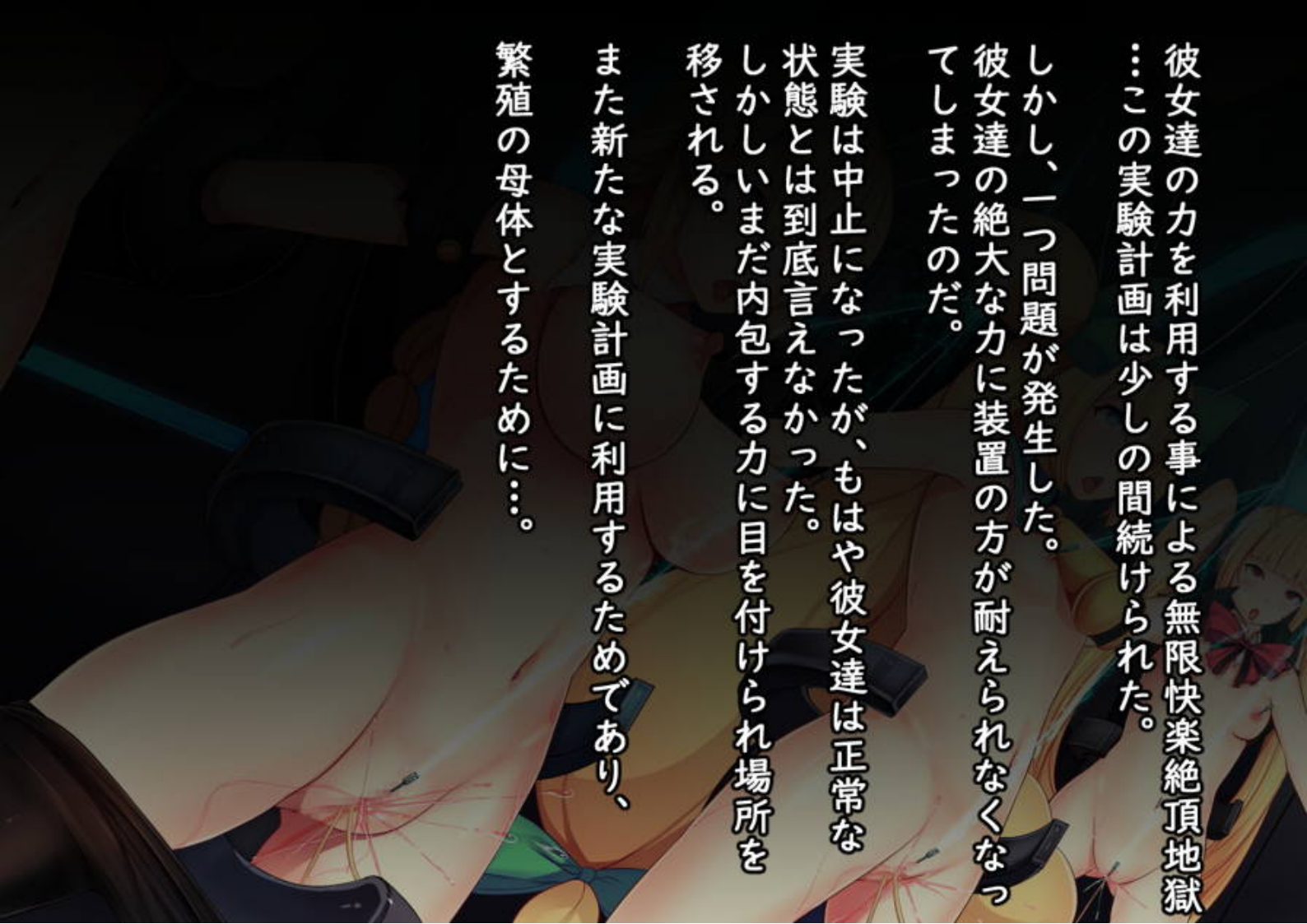
「あっ♡あっ♡あっ♡、あああああああああんっ！」

「…こんらのたえられ…あ♡あ♡っ♡っ♡っ♡！」

装置が与える快感に絶叫を上げ愛液をまき散らし絶頂する彼女達。力を吸われたことによる脱力感と快楽になにも考えられなくなり、ただひたすら快感に悶え苦しむ。

かつては美しく、可愛らしく、そして役目のために闘った彼女達も、いまでは研究者を喜ばす玩具であり機械を動かすパーツでしかなかった。





彼女達の力を利用する事による無限快樂絶頂地獄
：この実験計画は少しの間続けられた。

しかし、一つ問題が発生した。

彼女達の絶大な力に装置の方が耐えられなくなっ
てしまったのだ。

実験は中止になったが、もはや彼女達は正常な
状態とは到底言えなかった。

しかしいまだ内包する力に目を付けられ場所を
移される。

また新たな実験計画に利用するためであり、

繁殖の母体とするために…。

ラウンド③【拘束触手壁尻】

薄暗くそして広く長い通路に、黒く蠢く物体に半身を取り込まれ無様な姿を晒す3つの姿があった。

ノエル・マコト・ツバキ

かつての士官学校での同期であり、今では共に戦う仲間でもある3人である。

ノエルが捕まったという知らせを受けたマコト・ツバキの2名は組織の施設に乗り込み、ノエルの救出に成功。あとは脱出するだけだった。

しかし出口までの通路でアラクネと言われる生物に再度襲われてしまったのだ。

先の凌辱による【淫紋】によりまともに戦う事のできないノエルを庇いながらの戦いに防戦一方となり、ついには3人とも動きを封じられてしまう。

新たな凌辱の宴が始まろうとしていた。

「つく！はあ…はあ…抜け、出せない！」

衣服は全て剥ぎ取られ、自身の恥部を突き出すような恰好で固定されてしまった3人。

「話を通じる相手じゃないみたいね…なにか手を…」

「んっ！キモチワルイからさっさと、放してよっ！」

「んぶうっーじゅぶっ、うえるっ…んぶうっー！」

一本の触手が唐突にマコトの口内に差し込まれ蹂躪を始める。

「マコトっー？」

それを見たノエル達が、悲鳴にも似た声を上げるが、口内を蹂躪する触手に声を返すことができない。

「ぶぶぶっ、れるっ、じゅるっーや、やめ…むぐうー！」





「んふうっ〜っれるっ。こんなこと…じゅぷっ」

触手が次々と彼女達の口内に差し込まれていく。
次の標的はツバキだった。
触手から出る粘液と涎が合わさり卑猥な音を奏でていく。



「ツバキーマコト！そ、そんな…次は、わたむぐうっ！？」

「れるっ、じゆるっ、ぶはっ…んむうっ！じゆるるっ」

「ちゅぼっ、ちゅ、ちゅぶっ！やめっんむっ！」

触手は容赦なく口内を蹂躪していく。しかしただ凌辱するだけではなかった。触手の先っぽから甘い蜜のような液体が漏れ始めたのだ。

一種の媚薬のような効果があるこの液体を体内に取り込み、否応にも体を昂らせていく彼女達。



容赦のない口内責めと媚薬性のある液体により身体が
出来上がってしまった彼女達。
その体は興奮と昂りで汗にまみれ、股は3人そろって
愛液で光っていた。

「んぶうううっ♡!?!?!んぶっ、んうえっ♡!」

不意に独特な形をした触手生物が3人の尻に張り付き、そのまま彼女達の秘部に挿入をする。どうなっているのか確認することのできない下半身にはしつた突然の官能と衝撃にたまらず声を上げる彼女達。

それはさながら触手のような下着を身に着けているかのような光景だった。





「んほおっ♡じゅぶ、れるうっ！お♡んぼっ♡」

口内の蹂躪に合わせて、尻に張り付いた触手生物による
膣内の挿入も激しくなる。
上半身も下半身もいやらしい液体にまみれ、淫靡な
音を響かせた。

「んぶうっ♡ぶはっ、このままじゃ…おかしくなるうっ！」

「じゅるっ…やめ、やめへちゅぶうっ！」



「んぼおおおおお！♡♡♡♡」


口内と膣内に挿入された触手がよりいっそう激しく動いたかと思うと、前後同時に勢いよく精を吐き出した。

「おぼっ♡んぼっ♡じゅるっ、じゅるっ♡♡」

びくびくと快感で尻を跳ねさせる彼女達。



「アツアツな水melonを飲むのは最高だ」

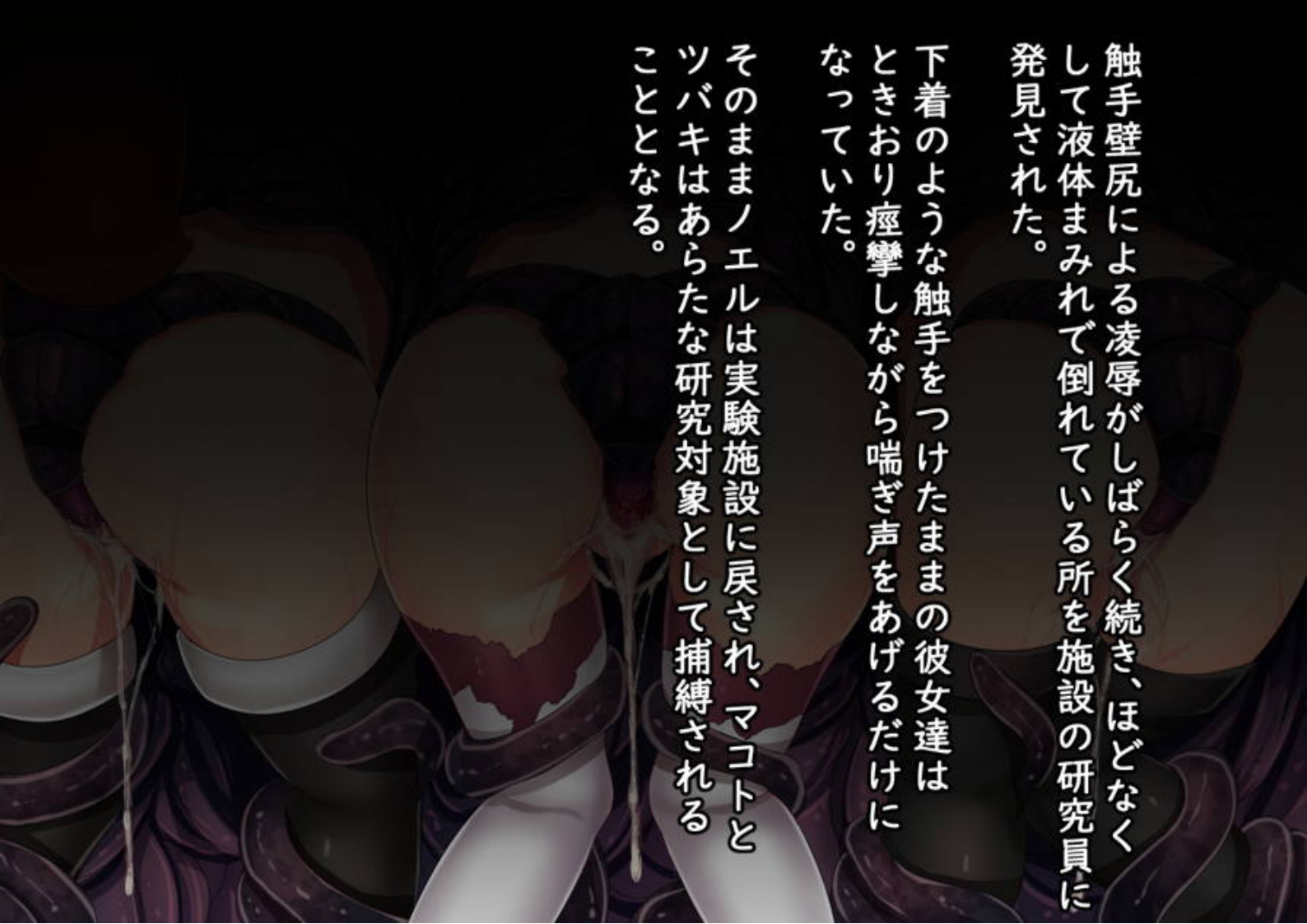


尻に張り付いた触手生物は膣内奥深くに大量の精を
解き放った後、そのまま挿入された状態で動きを止めた。

膣内からごぼりと大量の液体が溢れ、垂れていく。

「じゅぷ、ちゅるっ♡…はあ…はあ…はあ…れるっんむう…♡」

絶頂の余韻で朦朧としながら、触手についた精を舐めと
る彼女達。
そんな彼女達には抵抗する力も意志も残っていなかった。



触手壁尻による凌辱がしばらく続き、ほどなくして液体まみれで倒れている所を施設の研究員に発見された。

下着のような触手をつけたままの彼女達はときおり痙攣しながら喘ぎ声をあげるだけになっていった。

そのままノエルは実験施設に戻され、マコトとツバキはあらたな研究対象として捕縛されることとなる。

他の研究室で少女達の嬌声が響き渡るのと同時刻無機質な機械が設置された部屋に対照的な二人の女性が裸で拘束されていた。

一人は豊満な肉体を無様に晒す、世界屈指の力を持つ魔女。

もう一人は子供のようでもどこか妖艶な魅力を放つ肢体を剥き出しにされ醜態を晒す、死の象徴たる冥王。

物語の裏で世界を滅ぼす存在として暗躍をしていた彼女達だが、率いていた組織の研究者達の裏切りによって本人達は気づかないまま少しずつ洗脳・人体改造を施されていた。

他の強い力持つ人物達が次々と捕獲されるなか、圧倒的な力を持つ彼女達を手中に収めるための計画は最終段階に入ろうとしていた。



Good

股を大きく開くように拘束された彼女達だが、その視線はどこか焦点があつておらず、周りを囲む研究者達の好色な視線に晒されても時折みじろぎするだけで、大きな反応は示さない。

これは拘束している装置のシステムによるモノで、意識が深く落ちてきているような催眠に近い状態となっているからである。

Good



「Goo~」

研究者が彼女達に近づき、剥き出しの恥部に線に繋がれたピアスのような機械を装着する。さらに強制的に開かれた回から突き出た舌にも、同じようなものが装着された。装着される瞬間すししだけ身体を跳ねさせたが、やはり大きな反応は示さなかった。

その姿を見た研究者はにやついた顔を隠そうともせずその場を離れていく。

「Goo~」

「んほおおお！？あっ！あっ！あっ！あっ！お、おほお！？」

『浸透度40%システムレベルを上昇します』
拘束機械からアナウンスが流れた直後、彼女達は劇的な反応を示した。

感度改造によりさらに敏感になった部分からくる強烈な快感に、無表情だったその顔は無様に歪み、噴水のよう

「んほおおお！？あっ！あっ！あっ！あっ！お、おほお！？」



「はあ…はあ…んんっ♡…余、は…全てを、あっ♡」

装置から流れる電流が不意に停止する。
先ほどまでの無反応だった彼女達とは違い、焦点は定ま
ってないものの表情は歪み、身体は汗に濡れ股をおもら
しをしたかのようになっていた。

定まっていない意識のなか快楽の余韻に翻弄されながら
なにかうわ言をつぶやく彼女達。

「はあっ…んあっ…セリカは…わたし、が…」



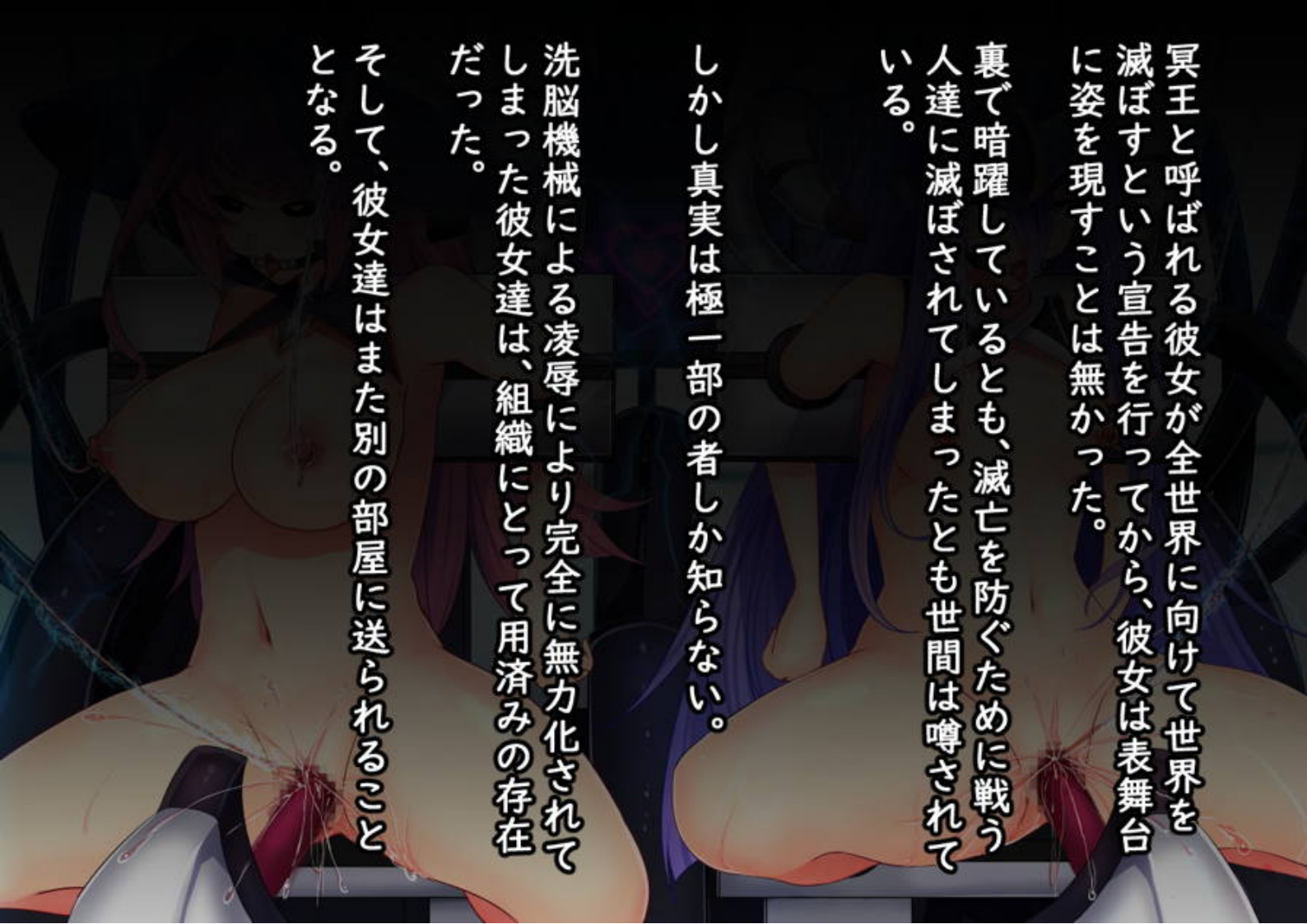
「イぐっ♡またイぐっ♡イぐっ♡おほおおおん♡♡！」

『浸透度95%システム最終レベルに移行します。』
高速ピストンと同時に恥部に流れる電流もいままで以上に強く流れ始めた。

かつてないほどの衝撃に彼女達は涎をたらし、無様に絶叫を上げ、愛液を噴水のようにまき散らし、唯一拘束されていない部位である腰回りを淫靡なダンスのように前後に震わせた。
それは、かつての彼女達を知っている者からすれば、考えられないほどの醜態を晒した姿だった。

「イぐっ♡うううううう♡おほっ♡またイぐっ♡♡」





冥王と呼ばれる彼女が全世界に向けて世界を滅ぼすという宣告を行ってから、彼女は表舞台に姿を現すことは無かった。

裏で暗躍しているとも、滅亡を防ぐために戦う人達に滅ぼされてしまったとも世間は噂されている。

しかし真実は極一部の者しか知らない。

洗脳機械による凌辱により完全に無力化されてしまった彼女達は、組織にとって用済みの存在だった。

そして、彼女達はまた別の部屋に送られることとなる。

繁殖実験室と言われる場所がある。

それは研究が終わった被験者や、まだ利用価値の残っている者、単純に力を秘めている者をその場所に送り母体として生かすための場所である。

先の魔力吸収のための機械凌辱の実験体となっていた少女達三人は意識を失っている間にこの場所に運び込まれた。

そして容赦無く行われる黒い不定形の生物による繁殖行為。

普通の人間であれば再起不能となってしまうような状況でも彼女達は耐えることができてしまう。さらに感度を上げられた身体と淫紋による快楽が彼女達の抵抗する意志を徐々に砕いていった。

彼女達が繁殖室に囚われてから数日の時がたった

「うあ……く、はな……しな、さい……」

「うう……おなが、くるし……」

「はあ……はあ……」

繁殖室に送られて数週間後、彼女達は早くもその身に宿していた。刻まれた淫紋の効果により母体の力を吸い取って胎内の成長を促進させているのである。それによって、幼い身体には不釣り合いなほどお腹を大きくさせていた。



「ま、またっ…あああっ…!」

「んぎい…?もう、むりい…おにやか、があ!」

「も、もう、やめ…んおおおっ!いやあああ!」

幾度繰り返されたか分からない触手の抽送が始まった。
太い触手によって責められ、たまらず声をあげてしまう。

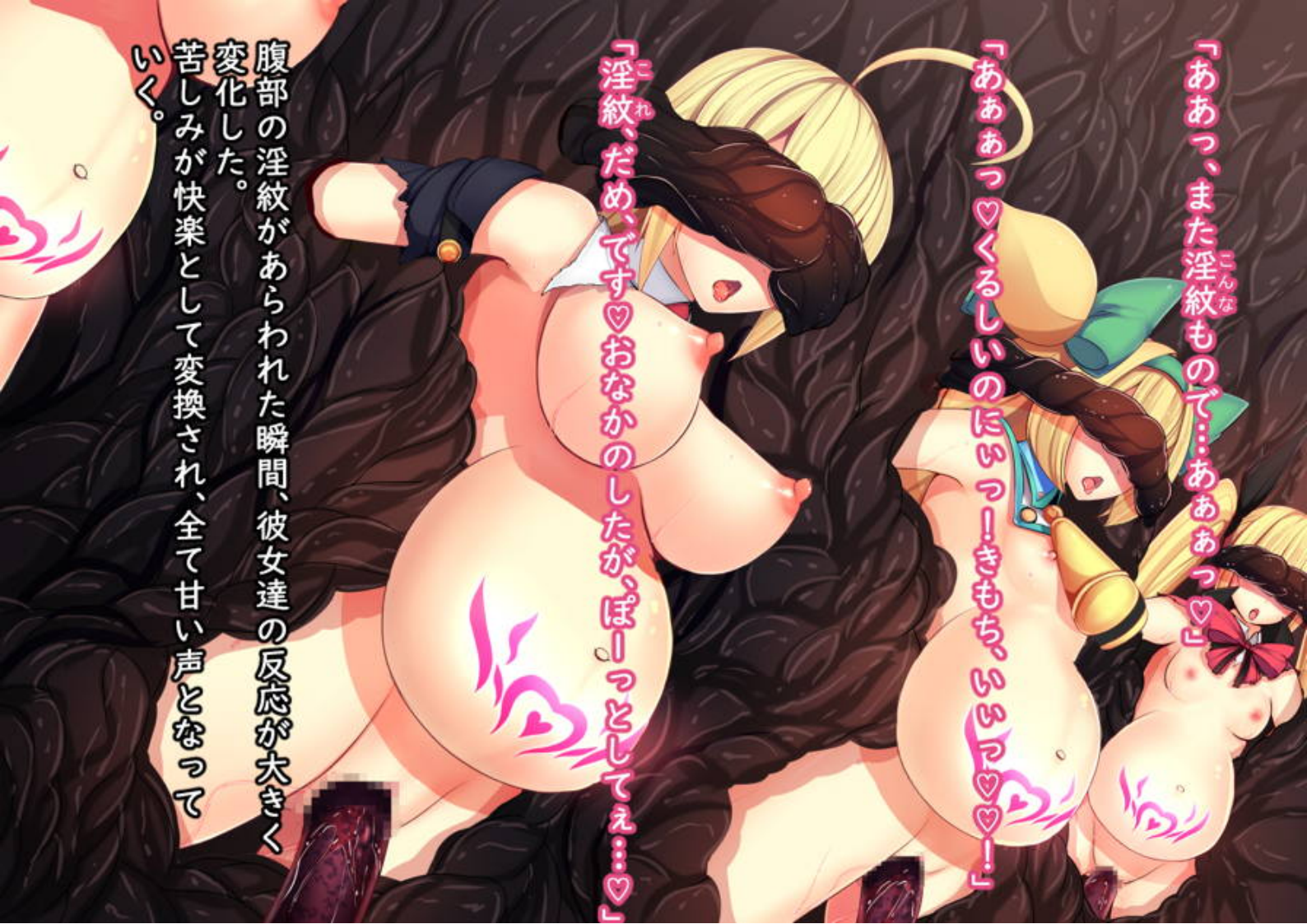


「ああっ、また淫紋ごんなもので…ああっ♡」

「ああっ♡くるしいのぽっ♡…きもち♡ら♡♡♡♡♡」

「淫紋これ、だめ、です♡おなかのしたが、ぽっ♡としてえ…♡」

腹部の淫紋があらわれた瞬間、彼女達の反応が大きく変化した。
苦しみが快楽として変換され、全て甘い声となっていく。



「はぁ♡はぁ…な、なによこれえ…むねから、うそ、よ…」

「も、もう、おかひく、なるの、やああ…」

「んっ♡この感覚…乳房からなにかでて…」

触手の抽送が終わると、彼女達の乳房から母乳が垂れ始める。

それは、次に彼女達に襲い来るモノの事を如実に表していた。



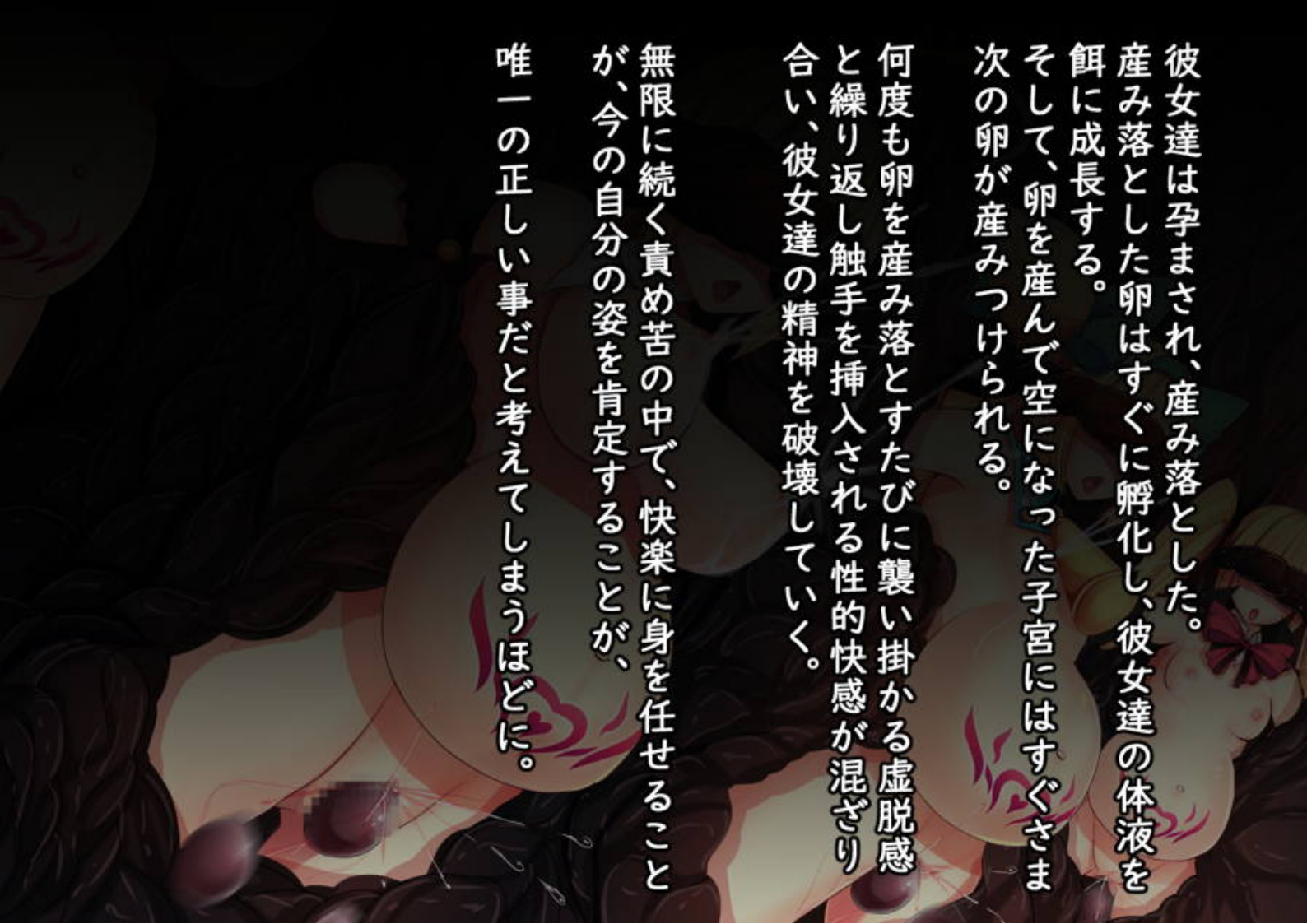
「い、いやっ!!こんな、産みたくないア!いやあっ」

「んひいつ♡や…おなか、が…なにか、でるううっ♡」

「あああっ!な、なにかが…でてる…産まれて…る!」

彼女達の膣内からでてきたモノ、それは黒い生物の卵の
ようになにかだった。





彼女達は孕まされ、産み落とした。
産み落とした卵はすぐに孵化し、彼女達の体液を
餌に成長する。
そして、卵を産んで空になった子宮にはすぐさま
次の卵が産みつけられる。

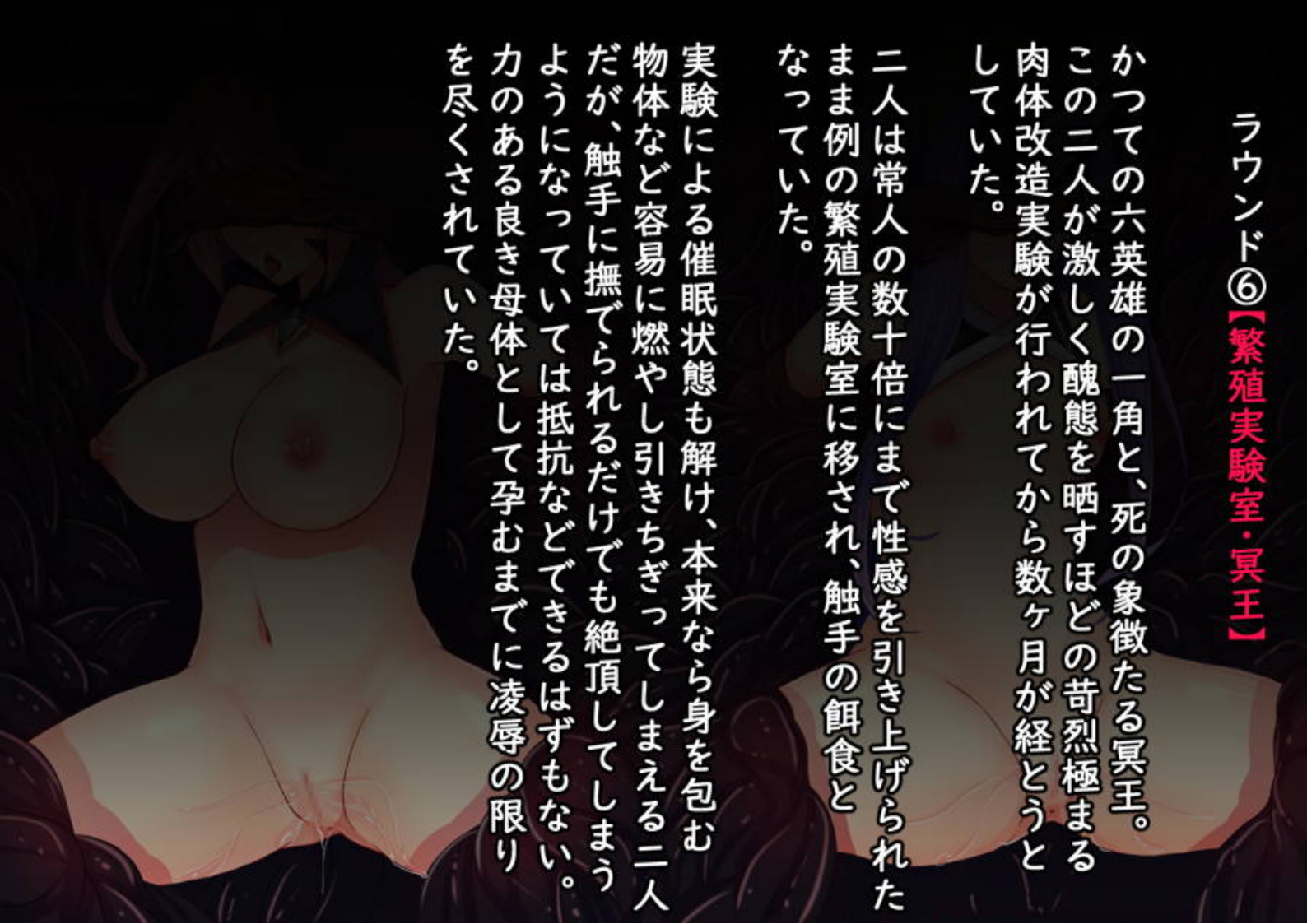
何度も卵を産み落とすたびに襲い掛かる虚脱感
と繰り返し触手を挿入される性的快感が混ざり
合い、彼女達の精神を破壊していく。

無限に続く責め苦の中で、快樂に身を任せること
が、今の自分の姿を肯定することが、
唯一の正しい事だと考えてしまうほどに。

かつての六英雄の一角と、死の象徴たる冥王。
この二人が激しく醜態を晒すほどの苛烈極まる
肉体改造実験が行われてから数ヶ月が経とうと
していた。

二人は常人の数十倍にまで性感を引き上げられた
まま例の繁殖実験室に移され、触手の餌食と
なっていた。

実験による催眠状態も解け、本来なら身を包む
物体など容易に燃やし引きちぎってしまえる二人
だが、触手に撫でられるだけでも絶頂してしまう
ようになっていては抵抗などできるはずもない。
力のある良き母体として孕むまでに凌辱の限り
を尽くされていた。



「お……お……か、斯様な肉団子に、孕まされるなど……っ」

繁殖実験室の一角に他の女性達と同じように恥部を
全て晒け出し埋め込まれた姿の彼女達がいた。
そのお腹は大きく膨らみ、冥王と呼ばれた彼女すら
例外なく孕んでしまったのだ。

「はあ、はあ……いやよ……こんな……うみたくない！」



「んおおおっ♡♡？や、やめっ、こんな…もので、あっ」

繁殖室に蠢く触手が彼女達の秘部に狙いを定め勢いよく挿入をした。

幾度となく繰り返された挿入に彼女達の膣内は完全に作り変えられ、抵抗もなく奥深くまで受け入れてしまう。しかし、その強烈な快感には慣れることはなく無様な声を抑えることはできない。

「おほおおおっ♡♡ずぼずぼされたら、またイっっっ！」



「ひっ♡は、はらがこわれるっ！これ以上そそぐなあ！♡」

そして激しいピストンのあとは決まってたっぶり注がれるのだった。刻まれた淫紋の発動によってさらに感度を引き上げられた状態では思考すらままならなかった。

「で、でてるっ！また、膣内にいっ♡イ、イぐっ♡♡」



「も、もうやめ…ほんとうに…はらが、くるし…」

触手が膣内から抜けていくと同時に、二人の乳首から母乳が漏れ出てくる。それは望んでいない生命の誕生の予兆だった。

「そんな…母乳なんて…!?おなか、くるし…」

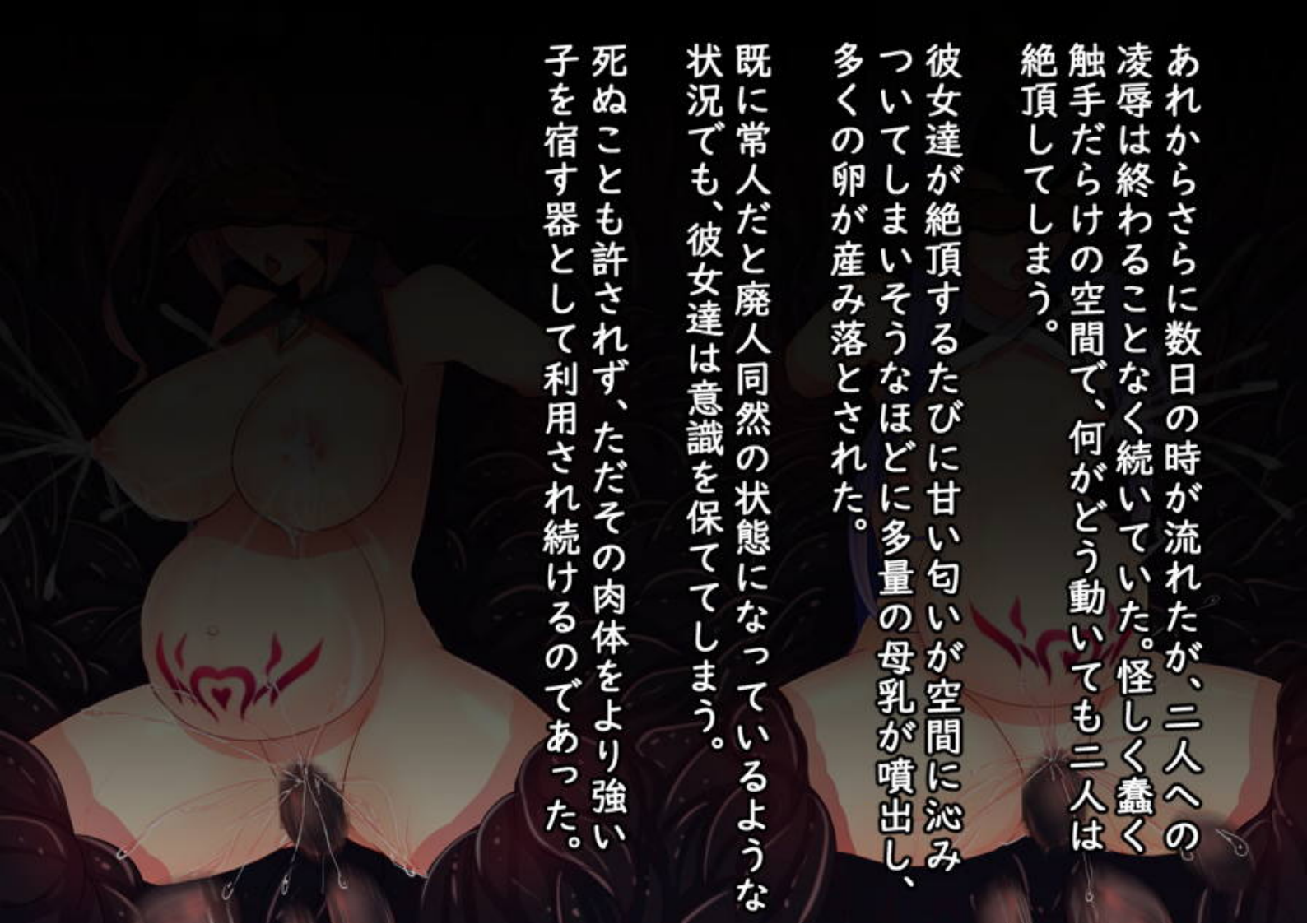


「ぐ、あぁっ♡硬いものが…腹の中からぁっ♡！」

やがて秘部をこじ開けるように卵のような物体が
徐々に顔を出した。
なにかをひねり出すような感覚に、挿入ピストンと
同等かそれ以上の快感の波が彼女達を襲う。

「ぎぎぎ…んんの感じはぁっ♡う、産まれるうっ！！！」





あれからさらに数日の時が流れたが、三人への凌辱は終わることなく続いていた。怪しく蠢く触手だらけの空間で、何がどう動いても三人は絶頂してしまう。

彼女達が絶頂するたびに甘い匂いが空間に沁みついてしまいそうなほどに多量の母乳が噴出し、多くの卵が産み落とされた。

既に常人だと廃人同然の状態になっているような状況でも、彼女達は意識を保っててしまう。

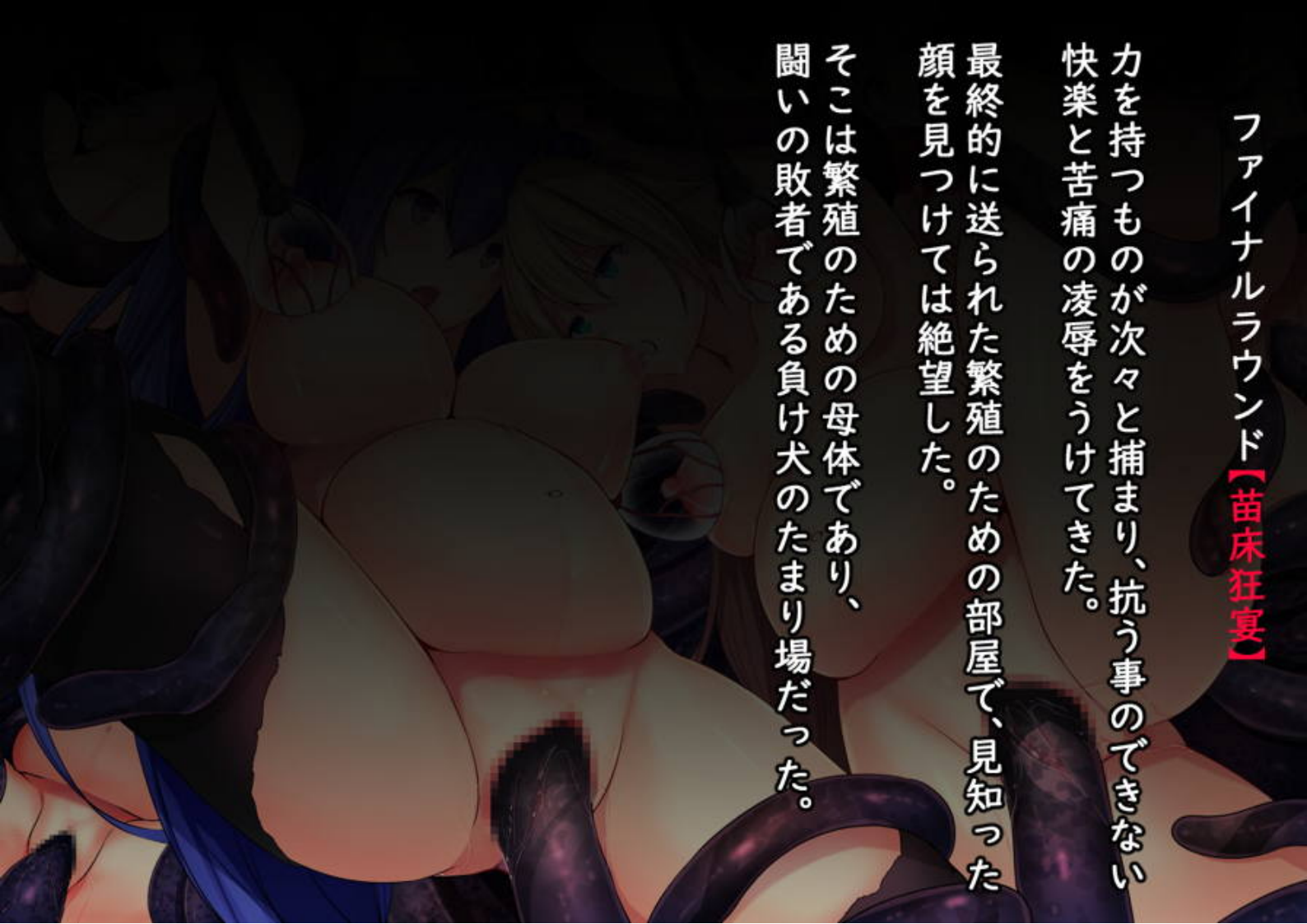
死ぬことも許されず、ただその肉体をより強い子を宿す器として利用され続けるのであった。

ファイナルラウンド【苗床狂宴】

力を持つものが次々と捕まり、抗う事のできない
快楽と苦痛の凌辱をうけてきた。

最終的に送られた繁殖のための部屋で、見知った
顔を見つけては絶望した。

そこは繁殖のための母体であり、
闘いの敗者である負け犬のたまり場だった。





繁殖実験室。ここでは捕らえられた者が人体実験の果てに最終的に送られる場所。いまでは数多くの被験者が収容されていた。希望を失った者はただただ快楽に身を任せ、絶望に足掻く者は次々と運ばれてくる見知った顔ぶれにさらに絶望に落とされた。

「ちゅるっ、れる…んんっ、マイのおっぱい…」

「んあっ、ノエル、乳首吸わないで…っ、気をしっかり…」



ここではみなお腹を大きく膨らませ、そのお腹には被験者の証である淫紋が浮かびあがった。

また望まない母体としての役目を果たす時がきたのだ。



「ふあ♡母乳吸われちゃってうるう…♡」

「んんっ♡ぶはっ♡ぐんっ♡ちゆるるっ」

産卵が終わると、すぐにまた挿入が始まる。
淫紋の効果により、母体の力を吸うことで胎内の成長
を促進させられている彼女達は四六時中
妊娠しているような状態だった。

「れろお♡マイのおっぱい、美味しいよお……♡」

「いああ……♡おっぱい、どまらなららら……♡」





「またイクっ♡おっぱい吸われてイクっ♡ああん♡！」

「んぶうっ♡またでたあ♡んくっ♡んくっ♡」



助けにきてくれるはずの仲間達が次々と捕まり
随ちていく。
快樂の宴はまだまだ終わらない。
彼女達の力が尽きるその時まで。

妄想
ASTRAL
FINISH

The image features a stylized title in pink and white. At the top, the Chinese characters '妄想' (Wangxiang) are written in a bold, outlined font. Below them, the word 'ASTRAL' is written in a similar outlined font, with a decorative horizontal line passing through the letters. The largest and most prominent part of the title is the word 'FINISH', which is rendered in a highly decorative, gothic-style font with intricate flourishes and a pink-to-white gradient. The background is dark and textured, with faint, stylized anime-style character elements visible, including a character with blue hair on the left and a character with dark hair on the right.

ん…ここ、は…？

私はまどろみから意識を覚醒させる。

一瞬例えようがない不快感を覚えるも、私の目の前にいる大切な人を見つけると、晴れやかな幸せな気分になった。

とても嫌な夢を見ていた事を告げると、彼は優しく抱きしめてキスしてくれた。

そのままベッドにお姫様だっこで運ばれる。

素直になってこちらから求めるのが癪だから、いつも抵抗するのだけど結局最後は許してしまう。

そして彼は、とんでもなく変態的な事を言い出したのだ。



「救いようがない変態ね…殺されたいの?」

私はため息をつきながらそう答えた。
何故この人はいつもこうなのかしら。度し難い変態
なのは知っていたけど、今回はよりにもよって行為して
いる姿を撮影したいですって?。ありえないわ。

…可愛いとかおだてても無駄よ。無駄、なんだから。

「……もうっ！わかったわ！これでいいんでしょ?」

結局いつも通り根負けして私は浚々脚を開いてポーズを
とった。

自分でも驚くぐらい濡れたあそこが露になって、
悔しいやら恥ずかしいやらで顔が熱くなる。

結局いつも拒み切れない。
私の寛大な心に感謝するべきね。

「ふあああっ♡…っんむ、ん、んっ」

何度も泣きながら受け入れてきた、立派なモノが私のなかにはいつてくる。正直に言っても気持ちいい。でもそれを悟られるのが癪なものと、撮影されているから私は声を押し殺した。

…全然押し殺せてないのは私もわかってるけど。



「あっ♡んっ♡ちよ、ちよっど、激しっ♡あああん♡」

挿入の気持ちよさにすぐに声が抑えられなくなった。
気持ちよさと同時に愛おしさを感じてたまらなくなる。
何故かしら…いつもより気持ちいい…？
まさか、撮られてるから？
いえ、そんなはずないわ。そんなの私も変態みたい
じゃない。

「んっ♡ああん♡もう、いきそう…ふああ♡」

いくときはちゃんとカメラの前で宣言しろって？
本当にどこまで変態なの！
あっ♡あっ♡でももう、考えがまとまらない。
くる…きちやう…





「あっ♡イク♡お○んこイきますっ♡ふあああん♡！」

考えるより先に宣言してしまった。
でも、宣言してイクの、もの凄く気持ちいい。
カメラの前でいきながら笑顔をつくってピースして、
私は今とんでもなく恥ずかしい恰好をしているのだろう。

少しだけと認めるわ。私も、変態ね。ほんの、少しだけ。



「はあ……♡はあ……♡きもち、よかったわ……少しだけね」

絶頂の余韻と幸福感に包まれて息を吐く。

こういうのも、たまには悪くないかもね。

こんな変態に付き合っただけであげられるのなんて、私しかない。

「またシたくなったら……気分次第で相手してあげるわ」

私にはやらないといけない役目があるけれど、大切な人と交わることぐらい許されるわ。

こんなにも愛してもらって、わたしはいま、とても……



幸せ



黒い不定形の物体に完全に取り込まれた、哀れな姿の少女がそこにはあった。

身体の大部分は埋まり、剥き出しになっている恥部と大きく膨らんだお腹が目立っている。
この場所で何が行われているのか明白だった。

なにか夢でも見ているのだろうか、時折身体を跳ねさせ
幸せそうなくぐもった吐息を漏らしている。

彼女は闘い、そして敗けたのだ。

敗けた者にコンテニュー等ない。



「むぐぐ…♡むぐぐ…♡むぐぐ…♡むぐぐ…♡むぐぐ…♡」

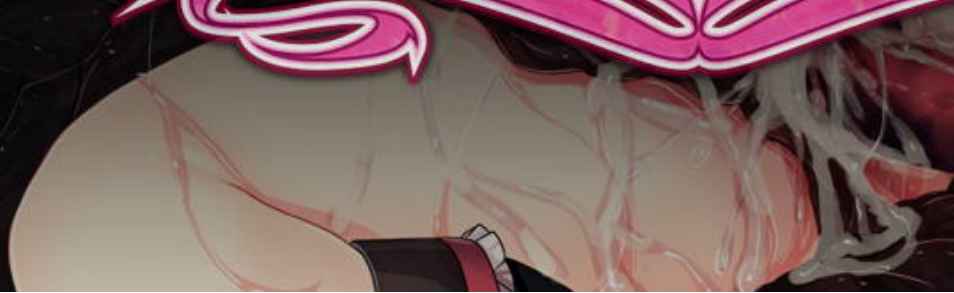
この牢獄のなかで、彼女はどこまでも幸せそうだった。
どこまでも幸せな夢を見続けられるのだ。
彼女にとってもはや現実はどちらなのだろうか。

これが闘いで敗けた者、敗北者の末路だった。

妄想

A-S-T-R-A-L

FINISH



先の凌辱によって意識を失った少女達の一人
プラチナIIザトリニティの中の人格のひとつで
あるルナ。

そんな彼女は四肢を這いまわるヌメヌメとした
感触に意識を覚醒させる。

感度倍増の人体改造、そして機械による快楽責め。
魔力吸収により戦う力を一時的とはいえ失い
身も心も堕ちたかのように見えた彼女だが、
その瞳の光はまだ消えていなかった。

そんな彼女をあざ笑うかのように、じわりじわり
と四肢に纏わりついていく触手。

希望の光を絶望が覆いつくそうとしていた。

「ん…んっ！？なんだこれっ！？きもちわるっ…！」

四肢を這いまわる感触に意識を覚醒させるルナ。
あたりを見回すも黒い塊に覆われており、ここがどこか
すらも分からない。

「さっきは変なやつらにわけわかんなくされて…んっ♡」

意識を失う前に受けた機械による凌辱と快楽の記憶が
よみがえり、身体を震わせると同時に恥部が甘く疼いた。

「ど、とにかく！キモチワルイからさっさと放せよお！」

そう叫ぶが、触手は不気味に蠢くだけだった。

「う、うう…セナの声も聞こえないし…最悪…」

「ひうっ！な、なな、なんだこれえ！張り付いて…、あん♡」

秘部に張り付いた触手に驚愕し、その感触に甘い声をあげてしまうルナ。

ぴったりはりついたソレは、くちゆくちゅと蠢き

継続的に甘美な快感を与えてきている。

「ひゃっ♡や、やめ…んあ♡は、はずしてっ！」

感度改造を受けた身体は正直な反応を示し、乳首はしっかりと勃ち、喘ぎ声を抑えることができない。





「ん♡ん♡ん♡♡きもちら…ら…ら…らやよくならっ♡」

気づけば秘部は愛液でぐっしより濡れ、張り付いた触手の隙間から溢れ出ていた。

「ひやああっ！ぬるって、なかにいっ！ひっ♡！」

秘部にあたる部分の触手がぐくばっと開き、そこに触手がするりと侵入していく。愛液が溢れるほど濡れたそこは抵抗もなく奥まで受け入れてしまう。

「あふっ♡やっ、やめっ、奥に、ノックしてるぅ……！」

身体を振り動かし抵抗しようとするも、がちり触手に拘束された状態では頭を振り動かすことしかできなかつた。





ドプツと中に注ぎ込まれた液体に、声なき絶叫をあげる
ルナ。
それと同時に腹部に『淫紋』が浮かびあがった。

『~~~~~♡♡♡♡♡~~~~~』

「はぁ♡はぁ♡ん……♡はぁ♡ああん……♡」

絶頂の余韻と淫紋による強制発情の効果で、身体を刺激に跳ねさせながら意識を朦朧とさせるルナ。

「や、やめれえ……♡ほんろに……おかしくなりゆう……♡」

抵抗しつつもどこか期待のこもったその声色が如実に彼女の状態を表していた。





「ああ…いやーいやだあ…こんなの…ドドロドロ、あついで♡」
袋状に覆われた触手の中に白いドロドロとした液体が
満たされていく。
全身が漬かるほどに満たされていくコンシを抵抗する事も
できず眺める事しかできない。

「んえ♡くっくっ…はっ、このままじゃ、おぼれ…」

「んむっ♡じゅるるっ♡んぐっ♡んぐっ♡」

朦朧とする意識の中で口内に挿入された触手に
しゃぶりつくルナ。

先っぽから溢れ出る液体を飲み込むと不思議と幸せな
気分になりなにも考えられなくなった。

その間にも周囲は液体で満たされていく。
やがて彼女の身体はドロドロとした白い液体に沈んで
しまったのだった。

「じゅぽっ♡じゅるっ♡じゅるるう♡れるっ♡」

数日後触手に囚われた彼女の姿は大きく変わっていた。まず間違いなく生物を宿しているであろうお腹は大きく膨らんでおり、以前のように抵抗するそぶりはまったく無く、むしろ愛おしさを感ずるように触手にむしゃぶりついていた。

「んふうっ♡」

何かを感じ取ったのか秘部に挿入された触手がするりと抜けていく。





産卵が終わると再び触手が挿入される。
そしてまた産卵の時期がくる。
無限に続く快樂のループの中で、少なくとも彼女は、

幸せだったのかもしれない。

妄想
ASTRAL
FINISH